神に選ばれたことば（3）——時間の観念——

武内　道子

アラビア語は右から左へ書かれることはよく知られている。書かれたものを見てアルファベットを識別しようとすることは、英語をはじめとする西欧言語に慣れ親しんでいる者には、不可能に近い。文字の切れ目がないからである。アルファベットは28字あり、それぞれ isolated form はある。しかし語（又は句）として書かれるとき、語頭、語中、語尾によって形が異なる。語頭の形は isolated form に比較的近いが、語中と語尾はそれから推量することはむつかしい。

これだけをもってしても、せめてアルファベットだけでも覚えて辞書を引き引き読めるというくらいにしたいという望みは、萎えてしまう。おまけに、アルファベットは子音のみで辞書の単語は子音の流れるような連続で書かれてあって、母音を足して読まなければならない。母音の表記は（されるときは）、同違ってついたペンの汚点か紙のキズかと思うほどのしるしが、子音の上につく（′が上に付けば/a/，下につけば/i/，’が上について/u/，母音の欠如は小さい丸。である）。

外国語イコール西欧言語と思っているわれわれに馴染めないのは動詞の形である。ほとんどの動詞は三子音の連続で書かれる。たとえば、k-t-b の三子音によって与えられる意味は「書くこと」である。この最も単純な形は「三人称・男性・完了形」である。/kataba/ と読まれて、‘he wrote’ 又は ‘he has written’ の意味となる。辞書にはこの「原形」が与えられ、一つの原形の下に、根を同じくするすべての派生語が並ぶ。k-t-b の項目の下に、kitaabun「本」，maktabun「書くところ＝事務所），maktabatun「机」，kaatibun「作家」が出ているのである。名詞や形容詞も動詞の原形から派生した形であるから、辞書を引くにはまず原形が何であるかを知らなければならないということになる。

さらに、セミ語族特有の現象であるが、アラビア語の動詞の活用は完了形と未完了形の二種類に大別される。基本的には時制と直接関係なく、動作の完了・未完了を表わすものである。

原形（完了形）の/kataba/が「彼は（過去に）書いた」とも「彼は（丁度）書いてしまったところだ」とも理解される（日本語で過去を表す「た」が「電車がきた」に見られるように完了の意味を有していることと酷似している）。また売り買いの場では、まだ行為が完了していないにも抱らず、過去形が用いられるのは面白い。“I bought” とか “I sold” の形が使われるが、これは「買うことに同意した」「売ることに同意した」という意味あいであろう。

未完了形の用法は、現在の習慣と未来への言及である。動作の進行も未完了形そのままで be 動詞に相当するものは出ない。Ahmad speaks. Ahmad is speaking. Ahmad will speak. は同一の形が使われるわけである。また未来の願望を表すのに完了形を使うことがしばしばある。そうあって欲しいという願いを、既に実現した事実として述べるのである。

複文における動詞の形は、主節の動詞と従節の動詞の表す行為のどちらが早いかによる。すなわち、目的節では目的の達成が主節の行為のあとになるから、未完了形が使われ、一方 when 節ではその逆で完了形が使われる。つまり完了形は「相対的過去」を、未完了形は「相対的非過去」を表す（日本語の以前形ともいうべき「た」と共有する——「あした早起きしたら町まで出かけよう」）。

アラブの人々とつきあっていると、時間のことを気にしないことに苛立ちを覚える。「明日10時に来て下さい」という約束は余り意味がかく、せいぜい「明朝伺います（インシャアッラー）」というところで、午後２時ごろまでならいつでもよく、明日になって、又明日というものも一向に差しつかえない。いくつでどうするといった観念も、

年令さえもはっきりしない。過去は現在から切り離されたもの、過去から現在さらに未来と順序よく続くものといった感覚は持ちあわせない。時間に縛られて生活しているわれわれからみると、何ともつき合い難いところがある。

神は全能をもって、時とは関係なくこの世を造り、したがって神が人間の運命を決め、われわれが神の意志に帰依するのは、時間とは関係ないのである。アラビア語の動詞は、時の観念から離れてすでに完了した行為を表しているではないか——預言者マホメット以来の砂漠の勇者たちの信念であってきたのである。